

# airiti

## 代助的二百元所代表的意義

### —《在那之後》的金錢問題—

林寄雯

淡江大學日本語文學系助理教授

#### 摘要

由於平岡的失業，夏目漱石的小說《在那之後》裏的代助與三千代得以再次相遇。作品的第一章裏，代助同時收到了來自平岡與來自父親的兩封信。這兩封信都與金錢有關。在第八章，代助拿嫂嫂給他的二百元送給了三千代。因為這二百元，代助與三千代恢復愛的交往。而這二百元所代表的意義已經遠遠超過它原有的經濟面的價值。另外，作品的最末章裏，代助急於尋找一份工作的描述，更加突顯他想要進入積極生活的焦慮與不安。

從序章到終章，金錢問題與故事的發展緊密結合。本篇論文將就作品中的金錢問題加以整理，同時探討二百元所代表的意義。

長久以來，《在那之後》的第十四章所描述「回歸昔日自然」的場景備受矚目。本篇論文將往前追溯到作品的第七章。探討代助「想借她錢、想讓三千代滿意」的心情面的轉變。探討的焦點將集中在，非利害關係下的金錢授與所帶來的愉快心情，引領代助回到自然的這一點上。

關鍵詞：金錢、自然、愉快、愛、職業

# airiti

## The Connotation of "Money" in Natsumesoseki's *And Then:* Daisuke's Two Hundred Dollars

Lin Chi-Wen

Assistant Professor, Tamkang University

### Abstract

In Natsumesoseki's *And Then*, the episode, "Return Back to Nature" (自然の昔に帰る) in Chapter Fourteen, has been highly discussed. This paper aimed to gather and examine the varied perspectives on money in *And Then*, as well as to explore the meaning of Daisuke's two hundred dollars.

In *And Then*, Hiraoka's unemployment leads to Daisuke's encounter with Michiyo. In the first chapter, Daisuke simultaneously received two letters from Hiraoka and his father. The two letters are closely related to the financial difficulties. In Chapter Eight, Daisuke gave two hundred dollars subsidized by his sister-in-law to Michiyo. On account of the two hundred dollars, Daisuke awakens in him a love for Michiyo. The value of the two hundred dollars, however, is far more than the financial support itself. Moreover, in the last chapter, Daisuke's eagerness to find a job reveals his anxiety and unease. This paper, therefore, initiated a discussion on Chapter Seven to delve into Daisuke's transformation in terms of his willingness "to lend Michiyo money and to satisfy her."

Natsumesoseki weaves ideas about money into the texture of the story in *And Then*. Thus, the discussion focuses on a disinterested money-based relation; and the enjoyment which it brings about takes Daisuke back to "Nature."

Key words: money, nature, enjoyment, love, vocation

## 代助にとっての二百円の意味

### —『それから』の金銭問題—

林寄雯

淡江大学日本語文学科助理教授

#### 要旨

『それから』の代助と三千代の再会は、平岡の失業がきっかけであった。第一章で、代助は平岡と父の両方からの手紙を同時に受け取った。両方とも経済的な事情が背後に潜んでいる。第八章で、代助は嫂から二百円を貰って、三千代に上げた。二百円はその本来の経済的な価値を遥かに超えた作用が生じていて、三千代との愛の交流のきっかけとなった。また、『それから』の最終章には、「職業を探して来る」代助の姿が彼の積極的な生活に入ろうとする苛立たしさと不安とともにクローズアップされている。

金銭の問題は序章から終章まで緊密にストーリーの展開とかかわりあっている。周知のように、漱石ほど金銭にこだわった作家はいない。本論は『それから』に取上げられた金銭の問題を要約しながら、代助にとっての二百円の意味を考えてみたい。

従来は『それから』の第十四章の「自然の昔に帰る」場面が注目されてきたが、本論はその「自然の昔に帰る」決心の兆しとなる第七章に遡って、「三千代に金を貸して満足させたい」という代助の心情の変化を探る。利害関係のない金銭の授与にともなう愉快的な心情が代助を自然へと導いていった点に注目したい。

キーワード：金銭 自然 愉快 愛 職業

## 代助にとっての二百円の意味

## —『それから』の金銭問題—

林奇雯

淡江大学日本語文学科助理教授

## 1. はじめに

『それから』の代助と三千代の再会は、平岡の失業がきっかけであった。三年前、代助の周旋で三千代と平岡は結婚し、新夫婦は平岡の支店銀行への転勤により、京阪地方へ移っていった。『それから』は平岡が仕事の失脚で、三千代をつれて上京し、代助を訪ねてくることからストーリーが始まった。『それから』の第一章で、代助が平岡と父との両方からの手紙を同時に受け取ったことには、深い意味があると、越智治雄は指摘する。平岡の方には三千代が絡み、父の方には佐川の娘との政略結婚が内在しており、双方とも経済的な事情が背後に潜んでいると論じられている<sup>1</sup>。

第八章で、代助は嫂から二百円を貰い受けてから、三千代に渡した。代助が素直に嫂の同情を受け、また同情をこめた愛を三千代にささげた。二百円にはその本来の経済的な価値を遥かに超えた作用が生じていて、理屈のみに生きている代助にとって、三千代との愛の交流のきっかけとなった。三千代との会見を重ねていくうちに、自分をこの薄弱な生活から救いうる方法はただ一つのみであり、それは三千代に逢うことであると、代助は悟った。彼はしだいに三千代の運命に対して一種の責任を帯びねばならないように自覚し、「自ら進んで求めた責任」を自認した。最終章には、「僕は一寸職業を探して来る」と門野に言い捨てて、「頭が焼け尽きるまで電車に乗って行こう」とする代助の姿が彼の積極的な生活に入ろうとする苛立た

<sup>1</sup> 重松康雄注釈（1988）『夏目漱石集Ⅲ』角川書店発行の補注135によるものである。

しさと不安とともにクローズアップされている。

金銭の問題は序章から終章まで緊密にストーリーの展開とかかわりあっているほか、賄賂に絡む日糖事件、友人の寺尾に対する金銭の融通、兄誠吾の金銭観などもが挿入されている。周知のように、漱石ほど金銭の問題にこだわった作家はいない。本論は『それから』に取上げられた金銭の問題を要約しながら、代助にとっての二百円の意味を考えてみたい。

## 2. 代助にとっての職業

第二章に、代助と平岡は三年ぶりに会ったが、その日に二人は人生の経験に関し、論議を交わした。「生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が人生に於て有意義なものと考へてゐる」(二) 代助は次々と人生に対する自己の経験論を発した。

「僕は所謂処世上の経験程愚なものはないと思つてゐる。苦痛があるだけぢやないか。」(二)

「(前略) 麵麩に関係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考へえてるらしいが、僕の住んでゐる贅沢な世界では、君よりずっと年長者の積りだ」(二)

代助の論法に対し、平岡は冷淡でも軽蔑でもないような口吻で、「何時までもそう云う世界に住んでゐられれば結構さ」(二)、「もう大抵世の中へ出なくつちやなるまい。其時それぢや困るよ」(二)の返答を以って返した。この三年間復活祭のような経験を満喫しようとする代助と違い、平岡は赴任当時自分の考へた計画を棚あげにして、周囲と融合していく。仕事上の失脚は、関という同僚が芸妓と関係し、知らない間に会計に穴をあける結果となった。それが露見したにより、関は解雇され、自分も辞職を申し出たのだと平岡は説明した。しかし、関が使い込んだ金銭は平岡が出したとの因果関係の説明であり、しまい「あれつ計りの金を使い込んで、すぐ免職

airiti

になるのは気の毒な位なものさ」(二)と関に同情した。その関という男は平岡自身の言い逃れであるかもしれない。「あれつ計りの金」(二)は「千に足りない金」(二)だからといって、平岡が支店長からその金銭を借りて穴埋めをしたものである。

代助の論法によると、平岡の処世上の経験はまったく劣等な経験であって、「麵麩を離れた贅沢な経験」こそ人生の真の意義がある。代助の今日の生活は父が保障しているから、彼は「無論食ふに困る様になれば、何時でも降参するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか。」(二)というような大言を放つことができた。平岡と代助はお互いに相手の無経験さを嘲笑っている。代助の「贅沢の世界」はもちろん平岡の贅沢な生活とは別世界なものである。

第三章では、代助の遊民としての生活ぶりがつづられている。代助は月に一度本家へ金を貰いに行き、親の金とも、兄の金ともつかぬものを使って生きている。父からも、嫂からも説教を浴びせられるが、彼は自分を上等人種と考えている。しかも「職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種」(三)だと考えている。父にとって代助は「三十になつて遊民として、のらくらしてゐる」(三)のは不体裁であって、「何も金を儲ける丈が日本の為になるとも限るまい」(三)から、代助に奮発してほしい。嫂には「貴方は寝てみてお金を取らうとするから狡猾よ」(三)といわれる。

平岡一家が借家に引越した後、代助は訪ねた。『それから』の第六章では、人生の議論が再びこの二人の友人の間に沸き上がった。今回は働くか、働かないかが議論の焦点となった。平岡はすでに人生の経験からいえば、失敗を嘗めた人間だが、彼は「失敗しても働らいてゐる。又これからも働く積りだ。」(六)と自分の将来に意欲を持続させた。後に新聞で経済係りの仕事が決まった平岡にも彼の「活動」する人生観を示している。代助の消極的な哲学を聞かされても彼は彼自身の活動の行為を進めている。代助の疑問に対し、彼は「無論大いに遣る積りだ」(十三)、「新聞にあるうちは、新聞で遣



る積りだ」(十三)、「出来る積りだ」(十三)と明瞭な答えをつぎつぎに出した。積極的に行為を求める平岡が代助に対し、「何故働かない」と訝っても全く理に叶う質問であった。

「何故働かないって、そりや僕が悪いんぢやない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟に云ふと、日本対西洋の關係が駄目だから働かないのだ。第一、日本程借金を拵らへて、貧乏震ひをしてゐる国はありやしない。この借金が君、何時になつたら返せると思ふか。そりや外債位は返せるだらう。けれども、それ 計りが借金ぢやありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。(後略)」(六)

ここの「借金」は日本対西洋の文化のアンバランスをさしている。西洋の圧迫を受けている国民には考える余裕がなく、碌な仕事も出来ない。そこで、代助は彼の無為な生活の正当性を訴えているが、『それから』の代助と平岡は、西洋の圧迫の下に生息している対照的な人物として描かれている。生存競争のために「大いに遣る」平岡と、生存競争に「神経衰弱」になった代助がその時代の代表人物として登場している。平岡は自分の意志を現実的な社会に働きかけることによって、自分の「存在の価値」(六)を求めている。代助には世の中がよくなれば自分ももっと積極的に生きられると自分の「怠惰性に打ち勝つ丈の刺激」(六)を日本の社会の健全さに求める。二人とも文明に病んで自己を失う人である。

二人の議論は長く続いている。「食うための職業」と「神聖な労力」の議論であるが、平岡にしても代助にしても、相手の論法に納得することができない。しかし、三年前の代助と平岡はどうであつたろうか。三年前に、代助と接近していた時分の平岡は「人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人」(八)であつて、また平岡と接触していた時分の代助は、「人の為に泣く事の好きな男」(八)であつた。ところが、三千代に渡した二百円のお礼に突然平岡が訪ねてきた日、その日に平岡がとうとう自分から離れてしまったと代助は思った。「現代の社会は孤立した人間の集合体」(八)であつて、平岡は「人の同情を斥

ける様に振舞つて」(八)も、世を渡らなければならない。

代助と平岡は終章まで、交差のない線上に立った対極の二人であった。平岡は地方に赴任した当時の理想を棄てて積極的に社会と融合していく。一方、代助はそのままの精神の世界に居続けるのだろうか。彼は「生活欲を低い程度に留め」(十一)ながら、父に生活最小限の金をたよって、自分の世界に安住できるだろうか。『それから』の第一章に提起された平岡の手紙と父の手紙は明らかに代助の高尚な上等人種の終焉を暗示している。三千代の金策にしても、父の政略結婚にしても、代助は金銭の問題を通して、彼の無為な生活を考え直さなければならなくなった。

### 3. 金銭と自然の愛

『それから』の主題に、三つの流れが見られる<sup>2</sup>。一つは猪野謙二の論を筆頭とする「生の不安」と「社会的な不安」を「純乎とした一篇の恋愛小説」に託す展開である。もう一つは、亀井勝一郎の「知識人の肖像」や高橋和己の「知識人の苦悩」といった論で、そこに、知識人の精神面の苦悩が注目される。三つ目は「外の社会」と「内部の人間」との矛盾への超克に焦点が当てられる。『それから』の序章から終章まで、金銭が重要な要素として取り入れられ、上述した作品の主題と密着している。金銭と関連してくる概念に、「金銭と恋愛」「物質と精神」「社会と個人」「現実と非現実」が対照的に捉えることができる。

『それから』の第十四章に、代助は佐川の娘の縁談を断り、三千代との愛を発展させようと決意し、「今日始めて自然の昔に帰る」という次の名場面が描かれている。

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。こう云ひ得た時、彼は年頃のない安慰を総身に覚えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始めから何故自然に

<sup>2</sup> 石井和夫がまとめた『それから』の研究史によって分けたものである。出所は竹盛天雄編(1980)『夏目漱石必携』学燈社 P171



抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雑に平和な生命を見出した。その生命の裏にも表にも、欲得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。

さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

この場面が『それから』のクライマックスであつて、中心主題とも言われる箇所である。代助にとっての自然の性質が注目され、また和田謹吾は『『それから』——〈自然の昔〉の実験<sup>3</sup>』という文章で、「この作品の中で最も多くの枚数を費やした章であり、漱石の最も力を注いだ部分」だと第十四章の重要性を説いている。代助が「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と決意し、白百合を飾った自宅に三千代を招いて愛を告白し、積極的な生活に入っていく場面は『それから』のもっとも重要な箇所となるが、本節では「自然の昔に帰る」と決心した代助の心の兆しを覗かせてくれる第七章にまで遡り、自然の性質を考えてみたい。次に引用した箇所から探っていく。

正直を云ふと、何故に金が入用であるかと研究する必要は、もう既に通り越してゐたのである。実は外面の事情は聞いても聞かなくつても、三千代に金を貸して満足させたい方であつた。(七)

早晩平岡から表向きに、連帯責任を強ひられて、それを断わり切れぬ位なら、一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遙かに愉快だといふ取捨の念丈は殆ど理窟を離れて、頭の中に潜んでゐた。(七)

「自然の昔に帰る」方法について、武者小路実篤が「自然の力を顕はす方法として恋が書かれてゐる<sup>4</sup>」と『『それから』に就て』に提示している。しかしながら、その恋の展開を考えれば、金銭が重要な役割を果たしていることは自明である。上京した三千代がはじめて代助を訪ねてきた現実的な理由は金の工面のためであつた。

<sup>3</sup> 竹盛天雄編(1980)『夏目漱石必携』学燈社 P32

<sup>4</sup> 平岡敏夫編(1991)『夏目漱石研究資料集成』第2巻 P59

また、三千代は雨に降られ損なって白い百合の花を提げてきて、「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」(十)と代助に昔を思い浮かばせる場面も二百円の小切手のお礼のためであった。百合の花は「甘たるい強い香」(十)を放ってテーブルの上に乗っている。代助はその「重苦しい刺激を鼻の先に置く」(十)のに耐えなかった。そのうち雨が降ってきた。三千代の「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」といった「妙な質問」(十)が登場される。三千代のこの「妙な質問」を想定した上で、第十四章の「雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに」、代助に「何故自然に抵抗したのか」と思わせた漱石の工夫が窺われる。ストーリーの展開から見れば、二百円の小切手は第十章の「白い百合の花」、そして第十四章の「自然の昔」へと繋がっていく要因となる。

第七章の引用に戻って考えると、三千代の事が気になり、三千代にお金を貸して心を満足させたい代助は自分が不徳儀と感ぜないばかりか、むしろ「愉快的な心持」であった。そして、代助の心情は理屈を離れて「愉快」と展開していく。第六章の代助は「金に不自由しない」(六)、また、「理屈を離れる事のできない」(六)人であったが、その第六章の「何故働かない」といった論理的なものとは大きくかけ離れて、第七章の代助にとって、金銭が切実なものとなってきた。代助の「三千代に金を貸して満足させたい」(七)心情が彼を自然に導いていくきっかけとなる。代助にとっての金銭の切実さは金の入用という現実問題として描かれている一方、代助は金の入用によって嫂の情を快く受けることができた。

三千代に頼まれた金策のことで、代助が最初に考えた人は兄であった。それで兄に無心したが、完全に失敗して帰ってきた。兄は「そんな場合には放つて置けば自から何うかなる」(五)というそつけない返答であった。なお、兄の理由は「義理や人情に関係がない計りではない、返す返さないと云ふ損得にも関係がなかつた」(五)という判断であったから。普段「金に不自由しない」(六)のような代助は、「多いに不自由してゐる男」(四)、「一文も出来やし」(五)ない男

になってしまった。

兄に対し、金策で失敗した代助は嫂に相談してみるようになり、兄の家を訪ねた。ピアノの練習をしていた嫂と姪の白い手の動く様子を見、また、欄間の画を眺めているうちに、彼は「金を借りる」事を殆ど忘れかけ、彷彿状態になったが、とうとう今日来た本題に突入した。代助は「だから思ひ切つて貸して下さい」(七)と言い出したが、「さうね。けれども全体何時返す気なの」(七)と思ひも寄らない嫂の質問を聞かされた。「金を借りる」ことにめぐる嫂と代助と間にこんな会話がされている。

「(前略)けれどもね、そんなに偉い貴方が何故私なんぞから、御金を借りる必要があるの。可笑しいぢやありませんか。いえ、揚足を取ると思ふと、腹が立つでせう。左様なんぢやありません。それ程偉い貴方でも、御金がないと、私見た様なものに頭を下げなけりやならなくなる。」

「だから先きから頭を下げてゐるんです」(中略)

「ぢや、それも貴方の偉い所かも知れない。然し誰もお金を貸し手がなくつて、今の御友達を救つて上げる事が出来なかつたら、どうなさる。いくら偉くつても駄目ぢやありませんか。無能力な事は車屋と同等なものです」(中略)

「全く車屋ですね。だから姉さんに頼むんです」(七)

第七章は三千代に「金を貸して」あげたい代助の心情の表れと嫂に「金を借りる」にめぐる問答より出来た短い章である。論理に熱心な代助が金の工面によって、自分の弱点を認め、なお、嫂との問答の間に情が流れている。兄に金銭の工面に行った時交わされた会話とは別世界のものであった。「返す気だの、貰ふ積りだの」(七)といった議論はもはや無意味なものとなった。

嫂にも失敗して帰ってきた四五日後、嫂から「御依頼通り取り計ひかねて、御気の毒をした」(八)といった手紙と二百円の小切手が代助に届けられてきた。代助と嫂の関係を考えれば、二人の関係は理に叶う貸借関係にほど遠く、むしろ情に訴える贈与関係であった。

airiti

金銭のこうした二面性はすでに『坊ちゃん』の登場人物山嵐と清とに反映されている。これから山嵐のところへ行って議論でもしようとする時の坊ちゃんは「あした行って一銭五厘返して仕舞へば借も貸もない。さうして置いて喧嘩をしてやらう。」(『坊っちゃん』六)と氷水を一杯奢られた一銭五厘を返さないと気がすまない。その一銭五厘を返すか、引き込めるかのことで、坊っちゃんと山嵐との交友関係が変化する。一方、坊っちゃんと清との金銭関係は『坊っちゃん』第一章にこう描かれている。

是はずつと後の事であるが金を三円計り貸してくれた事さへある。何も貸せと云つた訳ではない。向で部屋へ持つて来て御小遣がなくて御困りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。実は大変嬉しかつた。(『坊っちゃん』一)

借り貸しの関係は人間を理に叶う平等の関係におくとすれば、坊っちゃんと清の金銭関係には人間の情に甘受する心の表れがある。『坊っちゃん』の第六章に、坊っちゃんの山嵐に対する当時の心情と清に対する心情を次のように対照的に描かれている。

あした学校へ行ったら、壹銭五厘返して置かう。おれは清から三円借りて居る。其三円は五年経つた今日迄まだ帰さない。

返せないんぢやない、帰さないんだ。(『坊っちゃん』六)

代助は嫂の厳しい問答の裏に「女性の美しさと弱さ」(八)を感じとり、二百円はありがたいものであつた一方、「二百円は代助に取つて中途半端な額」(八)でもあつた。五百円の工面が中途半端の二百円で届けられたが、代助にとっては「快よいもの」であつた。代助は「女の斯う云ふ態度の方が却つて男性の断然たる処置よりも、同情の弾力性を示してゐる点に於て、快よいもの」(八)と思つた。嫂の「感情上中途半端」の二百円が仮に父からもらったならば、それが「経済的中途半端」と解釈するようになり、「不愉快な感」に打たれたかもしれないと代助は考えた。

中途半端の二百円は嫂の情を受ける面において、「愉快」なもの

であった。「感情上中途半端」と「経済的中途半端」の対極に「快よいもの」と「不愉快」とが対照的に描かれ、漱石は『坊っちゃん』に提示された金銭の二面性を『それから』の中途半端の二百円を通して再び追究した。

嫂に二百円をもらって、晩飯も食べずに代助は三千代を訪ねて来た。二百円を三千代に渡した代助は三千代の笑いを見た。「昔の様（八）になろうとする二人が「互の昔を互の顔の上に認め」（八）ることができた。第十四章の愛を告白するクライマックスの伏線となる場面を次に引用する。

代助は経済問題の裏面に潜んでゐる、夫婦の関係をあらまし推察し得た様な気がしたので、あまり多く此方から問ふのを控えた。帰りがけに、

「そんなに弱つちや不可ない。昔の様に元気に御成んなさい。

さうして些と遊びに御出なさい」と勇気をつけた。

「本当ね」と三千代は笑つた。彼等は互の昔を互の顔の上に認めた。（八）

金銭はからくりのような存在で、合理的に付き合えば、人間は孤立してしまう。「金銭は平等主義者です。千円の金は誰が持つても千円に通用するのが原則」と中村光夫は「金銭と精神<sup>5</sup>」という文章で述べている。また、金銭の生み出した自由と平等な人間関係は封建社会の秩序を破壊したが、同時に、金銭は相手の親切心とか正義感、あるいは同情などに訴えない点で、一種の非人間的な面を持っているとも述べた。

漱石自身は「道楽と職業<sup>6</sup>」と題した明治四十四年の講演の中で、金銭の合理的側面を次のように述べている。

此関係を最も簡単に且明瞭に現はして居るのは金ですな、つまり私が月給を拾五円なら拾五円取ると、拾五円方人の為に尽して居るといふ訳で取りも直さず其拾五円が私の人に対して為

<sup>5</sup> 中村光夫（1979）『秋の断想』筑摩書房 P 6

<sup>6</sup> 夏目金之助（1995）『漱石全集』第十六巻 岩波書店 P 399



し得る仕事の分量を示す符丁になつて居ます。

代助と三千代また代助と嫂との金銭関係は決して借り貸しといったような合理的な関係ではなく、むしろ同情を甘受する非合理的なものであった。その非合理的なものが代助を「愉快」と「快よいもの」といった感情に導き、つい代助を「自然の昔に帰る」という道にも導いていった。『それから』に描かれた「愉快」、「快よい」と「不愉快」、「不快」の用例に、次のようなものが挙げられる。

「愉快」、「快よい」の用例

- ① 彼の神経は斯様に陳腐な秘密を嗅いで嬉しがる様に退屈を感じてはいみなかつた。否、是より幾倍か快よい刺激でさへ、感受するを甘んぜざる位、一面から云へば、困憊してゐた。  
(二) (下線筆者、以下同)
- ② やつぱり三千代の事が気にかかるのである。代助は其所まで押して来ても、別段不徳儀とは感じなかつた。寧ろ愉快な心持がした。(七)
- ③ 早晚平岡から表向きに、連帯責任を強ひられて、それを断わり切れない位なら、一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遥かに愉快だといふ取捨の念丈は殆ど理窟を離れて、頭の中に潜んでゐた。(七)
- ④ 代助は嫂の態度の真率な所が気に入つた。それで、「えゝ、少しは馬鹿にしてみます」と答へた。すると梅子は左も愉快そうにハ、、、と笑つた。(七)
- ⑤ 否女の斯う云ふ態度の方が、却つて男性の断然たる処置よりも、同情の弾力性を示してゐる点に於て、快よいものと考えてゐた。(八)
- ⑥ 最後の会見に、父が従来 of 仮面を脱いで掛かつたのを、寧ろ快よく感じた。(十五)
- ⑦ 「僕は其時程朋友を有難いと思つた事はない。嬉しくつてその晩は少しも寐られなかつた。月のある晩だつたので、月の

消えるまで起きてみた」

「僕もあの時は愉快だった」と代助が夢の様に云った。(十六)

「不愉快」、「不快」の用例

⑧ 代助は平岡が何故こんな態度で自分に応接するか能く心得てゐた。決して自分に中るのぢやない、つまり世間に中るんだである、否己に中つてゐるんだと思つて、却つて気の毒になつた。けれども代助の様な神経には、此調子が甚だ不愉快に響いた。(六)

⑨ 平岡は不思議に不愉快な眼をして、代助の顔を窺つた。さうして、「何故」と聞いた。

「何故つて、生活の為めの労力は、労力の為めの労力でないもの」(六)

⑩ もし、二百円を自分に贈つたものが、梅子でなくつて父であつたとすれば、代助は、それを経済的中途半端と解釈して、却つて不愉快な感に打たれたかも知れないのである。(八)

⑪ 彼は平岡に面するときの、原因不明な一種の不快を予想する様になつた。(十)

⑫ たゞ是がため、今日迄の程度より以上に、父と自分の間が隔つて来さうなのを不快に感じた。(十三)

⑬ 髯の濃い男なので、少し延びると、自分には大層見苦しく見へた。触つて、ざらざらすと猶不愉快だつた。(十四)

⑭ 其仕打は父の人格を反射する丈其丈多く代助を不愉快にした。(十五)

⑮ 父に対しては只薄暗い不愉快の影が頭に残つてみた。(十五)

⑯ 父は最後に、「ぢや何でも御前の勝手にするさ」と云つて苦い顔をした。代助も不愉快であつた。(十五)

airiti

⑰ 代助は此間から三千代を訪問する毎に、不愉快ながら平岡の居ない時を捫まなければならなかつた。(十六)

上述の例を見ると、①と⑬とは物事に対する「愉快」と「不愉快」の用例であり、それ以外は人に対する「愉快」と「不愉快」の用例である。④は嫂梅子の「愉快そう」な感情を表す表現であり、⑨は平岡の「不愉快」を表す表現である。その他の用例は代助の心情を表す用例である。代助の心情を表す用例を見れば、「愉快」の対象が三千代と嫂であるのに対し、「不愉快」となる対象は平岡と父である。なお、⑥の用例のように、仮面を脱いだときの父親は快よく感じられ、⑦の用例のように、三年前の平岡は代助にとって愉快であった。三千代と嫂に暗示される自然の力、そして、平岡と父に暗示される社会の力がこうした代助の「愉快」と「不愉快」の心情に反映されていることが明らかである。

金銭面から考えれば、代助の自然は利害のない、人の情を甘んじる反面、人に情を与える快い心境である。『それから』の第十四章に提示された自然は欲得のなかつた、利害のなかつた、道徳のなかつた水の如き自然である。「漱石表現事典<sup>7)</sup>」の「自然」の項目によると、漱石の作品に描かれた自然は、『彼岸過迄』の「運命」に、『こころ』の「良心」に言い換えることができる。また樋野憲子が『それから』の「自然」は多面的であつて、その第一の様相は「自己の自然<sup>8)</sup>」だと指摘し、「自己の自然」は人間の感情の自然であつて、個の内なる自然であると述べられている。

佐川の娘との縁談は気が進まないままにも自然と進んだ。縁談と恋愛のジレンマに直面した時の代助はこう考えた。

<sup>7)</sup> 竹盛天雄編(1985)『夏目漱石必携Ⅱ』学燈社 P30

<sup>8)</sup> 内田道雄編(2000)『夏目漱石』二版 双文社出版 P185に所収する樋野憲子の『『それから』論——自然との出会い——』によつたものである。論文に自然の第一の様相は自己の自然、第二の様相は自己を超える自然、超越の自然だと指摘している。

彼は自分と三千代との関係を、直線的に自然の命ずる通り発展させるか、又は全然其反対に出て、何も知らぬ昔に戻るか。何方かにしなければ、生活の意義を失つたものと等しいと考へた。其他のあらゆる中途半端の方法は偽に始つて、偽に終るより外に道はない。悉く社会的に安全であつて、悉く自己に対して無能無力である。(十三)

結局、中途半端の二百円を受けた代助は彼の中途半端でない「自然の命ずる」ままの道を直進した。中途半端の二百円は前に述べたように「白い百合の花」そして「自然の昔」へと展開し、代助を一步ずつ自然へと導いていった役割を果たしている。

#### 4. 金銭に絡む政略結婚

『それから』の思想について、武者小路実篤は「『それから』に就て」という文章で「『それから』に顕はれたる思想を、自然の力、社会の力、及び二つの力の個人に及ぼす力に就ての漱石氏の考の発表と見ることが出来る<sup>9</sup>。」と指摘している。また、「自然の力を顕はす方法として恋が書かれてゐる」と前に述べた指摘がある。一方、社会の力を描き出すために佐川の娘との政略結婚が用意されている。社会の力は金銭を目当てにする父の思惑として描かれている。父に代表される社会の力は代助とどうかかわっていくかを次にまとめる。

三千代に二百円を渡して、「互の昔」を思い出した代助は父に呼ばれて、人生の大質問をされた。一つは「是からさき何うする料簡」(九)という質問であつた。次に、「独立の出来る丈の財産が欲しくないか」(九)と聞かれたが、条件付で佐川の娘を貰う。また「一層洋行する気はないか」(九)と言われたが、これもまた「結婚が先決問題」(九)であつた。

父は「実業家より基礎が確りしてゐて安全」(十二)な佐川家の財産を当てにしており、「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大変な便

<sup>9</sup> 同注4 P57

airiti

利で、且つ此際甚だ必要」(十五)という目的を持つことが後から分かってきた。父は「地方の大地主の、一見地味であつて、其实自分等よりはづつと鞏固の基礎を有してゐる事」(十五)を論拠に、佐川家との結婚を成立させたい。しかし、父は最初に、佐川家の娘は「自分の命を助けてくれた」(三)高木という恩人の孫娘が嫁いだ家で、とても「因念の深いある候補者」(三)と説明した。その父は代助に「人間は自分丈を考へるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人の為になんかしては心持のわるいものだ」(三)と説法するが、自分の対極に世の中、国家、人というようにずらりと羅列してくる。

代助の父は「劇烈な生活欲に冒され易い実業に従事」(九)して、年々「生活欲の為に腐蝕されつゝ」(九)、昔の自分と今の自分の間に、大きな相違があるのに、それを自認していない。父は代助を呼び寄せて、財産だとか、洋行だとかを言い出して、佐川の娘を貰うように説得するが、代助の許諾が得られないくて、急に「代助を離れて、彼自身の利害に飛び移った」(九)ので、代助は驚かされた。

代助にとって、父と兄の財産は「彼等の脳力と手腕丈で」(八)作り上げられたものではなかった。父と兄の財産は「人為的に且政略的に、暖室を造つて、拵え上げた」(八)ものであった。父に呼ばれる四五日前に、代助はすりと結託して悪事を働いた刑事巡査の話を読んだ。生活の大難に対抗せねばならぬ薄給の刑事が悪い事をするのはもっともだと代助は思ったが、父に会って結婚の相談を受けた時もこれと同様の気がした。彼は平岡に対しても同様の感じを抱いていた。

平岡は「泰西文明の圧迫」(八)の下で、彼の理想を捨てて、学生の清潔さも失つてしまひ、今は「劇烈な生存競争場裏に立」(八)たなければならない人である。そして、代助の父の場合はどうであろう。彼の父は「現代の生活欲を時々刻々に充たして」(九)いかななければならない人である。代助は父に満足を与えるための結婚は承



airiti

諾することができない。しかし、父からの財源の杜絶を恐れた。父に代表される社会の力は金の力で代助を圧迫するようになる。いくら「生活欲を低い程度」(十一)に抑えていても、父が充たしていこうとする「現代の生活欲」「劇烈な生活欲」が代助に迫ってくる。代助は決断をしなければならない。彼はこう考えた。

『もし馬鈴薯が金剛石より大切になつたら、人間はもうだめであると、代助は平生から考へてゐた。向後父の怒に触れて、万一金銭上の関係が絶えるとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出せば、馬鈴薯に嚙り付かなければならぬ。さうして其償には自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君であつた。』

親爺からの金で無為徒食の生活を送ってきた代助は結婚という、人生に横たわる一大問題で父の拵えた計画に従わなければ、彼の世俗を離れた自適優遊の暮しを失わなければならなくなる。すでに三千代に二百円をあげたことによって、「愉快」を感じ、「自己の自然」へと回帰した代助が彼の「自然の愛」を要求するのはもっとも自然の成り行きであった。かつての代助は「自然を以て人間の拵えた凡ての計画よりも偉大なもの」(十三)と信じていた。彼の信じていた「自然」への信条が金銭にかかわる結婚問題にふれてから、はじめて代助の現実な問題として実感することができた。「自然の愛」を追究する代助が直面すべき現実な問題を端的にいえば、それは父からの財源の杜絶と彼の三千代に対する物質上の責任である。代助は実際問題に目を向けらなければならなくなった窮地に追い込まれた。

『それから』の第六章で、「何故働かない」といった大言壮語をはいた代助の内面心理は第十六章の「職業求め」、そして、終章の第十七章の「職業探し」へと転換していく。次には職業に関する代助の論法の展開を取り上げ、代助が実際問題に目を向けていくプロセスを考えてみたい。

本論の第二節では高等遊民代助の職業論を取り上げた。代助の職業論は職業についていない二人の友人の会見から始まった。親の金

airiti

で職業につかないで、書生を相手にのらくらして、高踏主義的な生活を送っている代助は職業替というか、失業というか、今は無職の身で東京に帰ってきている平岡の経験に対し、同情するどころか、むしろ軽蔑の意を示した。「麵麩に関係した経験は切実かも知れない」(二)と頭の中で理解していても、金銭と交渉せずに生活をしている代助は自分の優越を誇るばかりであった。そこで、彼は「麵麩を離れ水を離れた贅沢な経験をしなくつちや人間の甲斐はない」(二)と無責任な発言をした。「職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上等人種」(三)と自認している代助は彼の「何故働かない」論法、「神聖な労力」論法を延々と述べ続けた。代助の職業論は彼の外部に対する刺激の無感動、無感激を反映し、金銭の切実さは彼にとって迂遠なものであった。三千代に金を貸して満足させたい心情のもとで、嫂の二百円を切実なものとして感じる事ができた。「三千代のために何かしなくてはみられなくなつた」(十三)代助は「もし父から物質的に供給の道を鎖された時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだらうか」(十五)と自分の未来を考えなければならなくなつた。百合の花の香りの中で三千代に会って、言うべきことを言ったときから、代助は自分と三千代の運命に対し、「一種の責任を帯びねば」(十五)ならないと自覚した。三千代の前に告白した代助は彼自身の変化を感じずにいられなかった。

今の彼は、不断の彼とは趣を異にしてゐた。再び半身を埒外に挺でて、余人と握手するのは既に遅かつた。彼は三千代に対する自己の責任を夫程深く重いものと信じてゐた。彼の信念は半ば頭の判断から来た。半ば心の憧憬から来た。二つのものが大きな濤の如くに彼を支配した。彼は平生の自分から生まれ変わった様に父の前に立つた。(十五)

今の代助は「三千代に対する自己の責任」への実感から、もはや無関心な一傍観者でいられない。彼は生まれ変わったような人となり、すべてと戦う覚悟をした。父の背後には兄、嫂がいた。平岡がいた。最後に大きな社会があつた。臆病と自覚してきた代助は自分

で自分の勇気と胆力に驚いた。『それから』の第十五章と第十六章は代助の「自己の責任」の発見の章ともいえよう。次の二箇所を取り上げて、「自己の責任」を強く意識した代助の姿を見よう。

三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至る迄彼女に対して責任を負ふ積であつた。(十六)

「だから、僕の思ふ通り、貴方に対して責任が尽せないだらうと心配してゐるんです」

「責任つて、何んな責任なの。もつと判然仰しやらなくつちや解らないわ」

(中略)

「徳義上の責任ぢやない、物質上の責任です」  
「そんなものは欲しくないわ」(十六)

代助は彼の三千代の前での告白、懺悔を増すにつれて、ますます自分の「物質上の責任」を感じるようになった。精神上三千代を所有する代助は彼の徳義上の責任を負う自信があつても、彼は三千代に対する「物質上の責任」を負う力がない。第十五章と第十六章は代助の「自己の責任」の発見の章である一方、この二章はまた代助の物質的な供給に対する不安が顕著に現れた章でもある。代助は自分の前途を気にかけた。彼は「もし筆を執つて寺尾の真似さへ出来なかつたなら」(十五)、「何をする能力があるだらう」(十五)と心配した。

父に「もう御前の世話はせんから」(十五)と勘当された翌日、代助は「父から受ける物質的の供給がもう絶えたものと覚悟」(十六)し、彼の「尤も恐るゝ時期」(十六)がやってきた。この時、代助の頭に「職業」の二文字が浮かんできた。

彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならないと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云ふ文字があるで、職業其物は体を具へて現はれて来なかつた。彼は今日迄如何なる職業にも興味を有つてゐなかつた結果として、如何なる職業

を想ひ浮べて見ても、只其上を上滑りに滑つて行く丈で、中に踏み込んで内部から考へる事は到底出来なかつた。(十六)彼の軽蔑していた「職業」はにわかには切実な問題として彼に迫ってきた。「自分より社会の子らしく見えた」(十五)寺尾の文筆を職とする仕事でさえ、代助にとって現実的なものとしてつかめることができなかつた。彼は狂乱に陥った。

中二日置いて三千代が来る迄、代助の頭は何等の新しい路を開拓し得なかつた。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で焼き付けられてゐた。それを押し退けると、物質的供給の杜絶がしきりに踊り狂つた。それが影を隠すと、三千代の未来が凄じく荒れた。彼の頭には不安の旋風が吹き込んだ。三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回転した。其結果として、彼の周囲が悉く回転しだした。(十六)

代助は「職業」、「物質的な供給の杜絶」、「三千代の未来」に対する極度の不安に襲われ、しまいには、周囲が回転しだしたという幻覚に陥った。ここの描写は『それから』の結末の次のシーンへと繋がる。

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」と云ふや否や、烏打帽を被つて、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。(中略)

「焦る焦る」と歩きながら口の内で云つた。

飯田橋へ来て電車に乗つた。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「あゝ動く。世の中が動く」と傍の人に聞える様に云つた。彼の頭は電車の速力を以て回転し出した。(十七)

代助の「あゝ動く。世の中が動く」という言葉の背後に、代助の未来に対する不安はクローズアップされているが、この不安は言うまでもなく、代助の物質によって作り上げられた社会への恐怖が潜んでいる。『それから』の結末について、亀井勝一郎は代助を狼狽させるのは三千代の夫たる平岡ではなくて、むしろ「生活」だという

次の指摘がある<sup>10</sup>。

代助を狼狽させるものは、必ずしも三千代の夫たる平岡ではない。平岡はすでに三千代を愛してゐないといふ実証的なたしかめの上に、代助の行為は始る。形式の上での夫婦は認めないといふ暗黙の倫理がある。彼を狼狽させるのはむしろ「生活」である。姦通の発覚によつて当然父兄から見離されるが、彼はパンを得るいかなる能力もないのだ。あれほど軽蔑していたパンのための労力が、第一の問題になる。三千代との恋が無償のものであればあるほど、いよいよハッキリと金が必要になるのだ。

金が最後のもっとも重要な因子として代助に働きかけてきた。

『それから』の第二章で描き始めた代助の職業論は、最終章の代助にとってはすでに論理的なものではない。「職業」の二文字はいかに上っ面でしかつかめないのである。いまの代助には通過しなければならない大きな関門となっている。

## 5. おわりに

『それから』は平岡の失業で始まり、代助の職業探しで終わる。結局、パンのための労力は代助の避けては通れない問題である。代助がこういう関門を通過しなければならないのは、言うまでもなく、三千代に対する自然の愛の発見ができたからである。彼が父の計画したとおりの結婚を受け入れれば、彼はいままでどおりの太平の紳士の生活を悠々とし続けていける。嫂の二百円がなかったならば、代助は三千代に対する愛の回復もできなかったかもしれない。金銭がもつ合理と非合理的な二面性を通して、代助は一つの実験にかけられた。彼は自然への回帰はしたが、彼の未来へわたっていく戦いがいまに炎のように、赤く燃え上がっていて、その幕が開いた。

『それから』では、代助にとって重要な意味をもつ二百円以外に、

<sup>10</sup> 大田登・木股知史・万田務編（1995）『漱石作品論集成』第六巻P9



各人物のそれぞれの金銭観が多く描かれている。各登場人物の金銭観をまとめることによって、『それから』の金銭問題を深く探ることを次のテーマにしておきたい。

使用テキスト 『漱石全集』第六巻 岩波書店 1994年

参考文献

- 猪野謙二（1966）『明治の作家』 岩波書店
- 越智治雄（1971）『漱石私論』 角川書店
- 佐藤泰正（1972）「夏目漱石 二つの自然」 『国文学』特集 近代日本文学と自然 学燈社 P97
- 和田謹吾（1973）「漱石の世界像 自然」 『国文学』特集 漱石文学の原点 学燈社 P156
- 荒正人の（1976）「漱石文学の物質的基礎」 『文芸読本夏目漱石』七刷 河出書房 P152
- 江藤淳（1982）『『それから』と『心』』 『講座夏目漱石』第三巻 二刷 有斐閣 P49
- 竹腰幸夫（1986）「夏目漱石の金銭哲学」 『文学に見る経済観近代作家十人』 教育出版センター P23
- 藤堂尚夫（1988）「漱石の一断面——金をめぐって——」 『仁愛 国文』第六号 P33
- 木股知史（1990）『『それから』の百合』 『夏目漱石 反転する金銭の時代』 有精堂 P55
- 王志松（2003）「漱石文学における金銭」 『広島大学紀要』P89